

(1) 改革の落とし穴^{注1)} – 〈試訳〉

注1) 原題は *D'une réforme dans son trou* であるがこう訳した(<https://www.cairn.info/revue-journal-francais-de-psychiatrie-2006-4-page-3.htm>)に準拠した

自由な見解など存在しない。と、この欄^{注2)}についてまず冒頭でこう言わなければならない。

注2)本稿が *le monde* 紙の *libres opinions* 「自由なご意見」という読者が投稿できる欄を意識して書かれたものである。結局 *le monde* 紙には載らなかったのだが、あまりの悪文で、*le monde* が掲載を見送ったのか、ラカンの方で自重したのかは不明である。

ディスクールにおいて、このディスクールのもつ狡智 *artifice* が当のディスクールにおいて暴露する必然性を明らかにすることの自由しかわれわれは与えられていない。狡智とは数学的なディスクールと精神分析で用いられる『自由連想』のことである^{注3)}。注3)このフレーズ全体で、ラカンはディスクールというものをヘーゲルの理性に対峙させようとしているように思われる。ヘーゲルの理性はその狡智 *List*(フランス語訳は *ruse* であるが *artifice* とはほぼ同義である)については、特にかれの『歴史哲学』の序論、〔第一篇 一般の序論〕〔二、世界史の理性観〕B、〔歴史の理念とその実現〕(b)〔二、世界史的個人、英雄〕の4番目の項目として〔理性の狡智〕が参考になると思われる。武市健夫訳、ヘーゲル全集10 改訳歴史哲学上巻、p.62(岩波書店)にある全文を、そのまま引用する。

それで、情熱の特殊な関心と普遍的なものの実現とは不可分のものである。というのは、普遍的なものは特殊な、特定の関心とそれの否定との結果としてしょうずるものだからである。特殊なものは、互いに闘争して、一方が没落して行くものにほかならない。対立と闘争にまきこまれ、危険にさらされるのは普遍的理念ではない。普遍的理念は侵されることなく、害われることなく、闘争の背後にちゃんと控えている。そしてこの理性が情熱を勝手に働かせながら、その際に損害を蒙り、痛手を受けるのは〔理性ではなくて〕この情熱によって作り出されるものそのものだということを、われわれは理性の狡智(List der Vernunft)と呼ぶ。というのは、それは一面では空しいもの〔否定的〕でありながら、他面では〔それがそのまま〕肯定的であるという現象にほかならないからである。特殊なものは大抵の場合、普通に比べると極めて価値の低いものである。だから、個人は犠牲に供され、すてられる。つまり、理念はこの生存と無情との貢物を自分で納めることをしないで、個人の情熱に納めさせるのである。

理性はその狡智により無傷のままにあるのだが、ディスクールは分析的ディスクールがその作用者、つまり分析家が対象 *a* であることにより、そしてこの *a* が剰余-ジュイールであり、アガルマ的対象(欲望の原因である *a*)は見せかけ *semblant* でしかなかったことを露呈してしまう。*D'un discours qui ne serait pas du semblant* というセミナー XIII(1971) のタイトルは「見せかけではないディスクールはありうるのか」という疑問形で置き換え、その答えとして「そのようなディスクールは存在しない」という定式で示されよう。

精神医学における改革と科学的「思い入れ」

この改革が始まったことは、フランスのいくつかの精神科のセンター施設 centres 注 4)において、さらには精神科の辺縁 décentre において、かれ等も精神科医としての市民権が与えられたことによって告げられる。

この改革は二階建てである。

教育の階。宜しかろう。かれ等精神科医はこの分野で言うべく言葉をもつことになるのだから。さらに宜しいことには、かれ等はこの分野でかれ等が知っている注 5)ことを教えることとなるのだから。注 5)ラカンにとって知とはつねに無・知が裏打ちされている。

実践の階。これはかれ等が、出自として社会的であることで役割を満たしているという、役割の原則に基づいている。この原則により『セクター』注 6)が設けられ、予防精神医学を含めた精神医療の名の下に、『セクター』のチームが任を負うことになる。注 6)セクター精神医療 psychiatrie de secteur とは 17 世紀以来の入院＝隔離を目的としていた精神病院入院治療から患者の解放と社会復帰への改革を推進するセクターによる精神医療であり、外来治療への展開が眼目にある。1960 年の Bernard Chetot(Michel Debré 内閣の下、厚生大臣 ministre de la santé publique を務める)の通達が端緒となっている。

Lucienn Bonnafé, Georges Daumézon, Philippe Paumelle, Sven Follin, Hubert Mignot, Louis Le Guillant, Bailly-Salin, Françoise Tosquelles 等精神科医が輩出される。

杞憂だとよいが、ひとつの階からもうひとつの階への棚上げと、二つの階のあいだで相手に尻拭いさせることが繰り返されることはないのであろうか。

(2)※

ここから大学内で、懸念が表明され論議される。医学系諸学科、文学系諸学科、さらにその他諸科学においてである。

絡繰りはこうである。教育の場において、このソシアトリー注 7)が広く取りあげられるようになった結果、このソシアトリーがなんらかの科学的研究によって保証付けが約束されているとした偏向した思惑が見られるのである。科学以外の保証づけがどうして働かないのか。注 7) sociatrie という語は wictionnaire によれば、Auguste Comte をもって嚆矢とされるが、精神科領域においてこの語を用いたのは Jacob Levy Moreno であると書かれているが、これは sociométrie の誤りであろう。<http://sante-medecine.journaldesfemmes.com/faq/42870-sociatrie-definition> によれば、「sociatrie とは精神医学における一専門領野である。社会のなかにおける行動の研究を基になされる治療上のアプローチなのであるが、この実践は普及することなかった。実地家にとって難しいのは、かれのもっている文化教養とはまったく異なる新たな概念を理解しながらこの方法を修得しなければならなかったからである。ソシアトリーの下での精神病理の研究の対象となるのは主に社会なのだからである」とある。となれば、斯様な研究は普及していないことはない。ただ、ソシアトリーという語がほぼ死語となってきているのであろう。ここではラカンによる幾分侮蔑的意味を込めた造語と捉えた方が解りやすい。

薬学関係の研究室は、ソシアトリーからの警告により、脅威に晒される研究機関の標的で最たるものであるが、一方で、化学物質以外での治療効果を認めない精神科医の方とて論壇を

去る様子もないのは好都合なのである。

ソシアトリーへの反論はより確かな論拠に基づく検討が求められるし、担当大臣注 8)が件の階について反論としてまとめたものだけでは済まされない。大臣曰く、ソシアトリーという語は教育の階でのみ使われているものだ、と。

注 8) *Ministre d'État chargé des Affaires sociales* 社会問題担当大臣 Maurice Schumann か *Ministre de la Santé publique et de la Sécurité sociale* 厚生及び社会保障大臣 Robert Boulin のどちらかであるが、実際 *sociatrie* という語が使われている例については不詳である。

このソシアトリーという語は、この語が適切にものごとを指し示していることから適切な語である。Ce terme est en effet d'autant plus pertinent que pertinente est ~~le~~ la chose même qu'il désigne.(と le を la に訂正した。)

社会的格差がより個人的な格差となり、構造的な格差注 10)となり、貧富の差がそのままこの社会的格差を産んでいることはじじつである。格差を管轄することとなった行政側注 11)にとっても、これを解消するための努力はじつに報われないものである。注 10)階級間の格差というものがない(因みにわが国においては一億総中流という意識が支配的である)、格差は階級とは異なる複合的構造によって決定されることを指しているのであろう。勿論次に挙げられる貧富の格差は世代を通じて(教育の格差、知の格差も手伝って)再生産されるものである。注 11)省の名称、閣僚(日本でいう大臣、担当大臣)や政務官の配置はその都度の内閣において変遷がある。現在は日本の厚労省に相当するものはフランスでは、*Ministère des Solidarités et de la Santé* 連帯及び厚生省(2017年、エドゥアール・フィリップ内閣発足以来)という名称になっている。

大学を管轄するのはこれらふたつの省であり、双方注 12)とも脅威を感じているのだが、この問題に目を光らせるようにしなくてはならない昨今に至っても、まったくもって知らぬ存ぜぬの態度留保を通してしている。

どうしてこういう事態になってしまったのか、筋道を立てて論ずるには、次のような例証が役立つはずだ。注 12) *Ministère de la Santé* 厚生省(当時)<現在、*Ministère des Solidarités et de la Santé*> と *Ministère de l'Éducation Nationale* 国家教育省

神経科と精神科の分離

検討が急がれるのが上記表題の例である。というのも、この旧弊は手をつけなくてはならない事態にまでなってきたのだが、ふたつはなかなか縁切りができない間柄なのである。なにしろ、この状況下でわたしは夢にまで見たのだが、これは稀な無意識の形成物であり、この思いつきからこの両者について遅ればせながら筆を走らせることとなり、本稿がその初稿なのである。

神経科と精神科は医学部によって資格制度化された専門科名称であるのだが、この合体である精神神経科という縁組みについては進化をみてきたが、目下改革というところまでで止ま

っており、完全なる離縁にまでは至っていない。

この両科の合体は過去 20 年間、精神科医たちによって、厚い教義的な支持を受けて来たのだが、今になってかれ等は、その終焉を手前味噌のように吹聴している。終焉とはことの流れであり、つまり、万犬が伝えてきた実とはその音源(ソース)が一犬の虚であった歴史的事実に学ぶことができる※※。

※改革の落とし穴 *D'une réforme dans son trou* がまずタイトルとしてあり、(1)精神医学に於ける改革と科学的「思い入れ」といった表記となれば解りやすいのだが、

«<http://www.valas.fr/Jacques-Lacan-D-une-reforme-dans-son-trou,014>»に従った。

※※古代エジプトのプタンホテップの教えによれば、「虚と嘘は時とともに消えゆくが、真理のみが不滅なのである」 *Les erreurs et les mensonges s'écoulent avec le temps. Seule la vérité demeure* であるが、この行はラカンによる一種の反語法であろうか。

つまり、当然ながら、かれ等精神科医たち注 13)も、その他大勢の精神科医と同様、〈大学〉の犬だった、いうならば万犬だったことになる。注 13) ils 「かれ等」の外延がどこまでなのかラカンははっきり言っていない。

改革の志は大層なものではあるが、大学に対峙したつもりが、大学の術中に嵌ってしまったのだから。ミイラ取りがミイラになるとはこのことである。

昨今は大の字の抜けた大学になってしまっているが、この大学の幹部教員に対して若気の至りが勢い余って自爆となるどころ、せいぜい四分五裂になっただけですんだのだから有難いと思った方がよい。

神経科と精神科の分体の例について明らかなことは、精神科医が神経学的事実 *fait neurologique* を見落として医療行為に走ることの危険性を強調するあまり逆の危険性を無視していたのであり、この点、心のケアには人文科学の教育だけで十分であるとする俗識を払拭するために精神医学の問題 *fait psychiatrique* は役立っていたのではないか。

科学への敬意のため、当世風に踊らされているものは、斯くも安易に過去を清算することを繰り返してきた。

精神科医は、薬力学を拡大解釈し、かれ等が普及させている向精神薬は科学的に製造されたものであり同一性試験にもパスしたものであるといった事実から自らを科学的だと看做していた。

一方、精神神経科から精神科への標榜の変更には、理想も掲げられておりこれは保証付きでもある。神経科医がもっている安全装置と科学的な格付けの高さから、神経科医の治療というお墨付きも相俟って、このおこぼれで精神科医の格付けの引き上げとなろう。おこぼれに与ることができるのは両科の交差点は脳であるからなのだが、精神科医たちが精神医学的な事実を引っ提げてデモのパレードを行うとして、この行列はこの交差点を通過するしかない。デモは他の場所では行うことができないのか。このパレードはそもそも開始されてのだとし

て、またわれわれ精神分析家を必要としているのだとしてだが。改革の波が拡がりを見せていることは重要ではない。行き着くところ、この拡がりの辺縁は「精神病院」という場所にまで及ぶ。そこへ、共同体は、そのなかで歩調の合わない成員を隔離しているのだ。精神病院の問題については2世紀にわたってソシアトリーは注目してきた。しかしながら科学がここではその威光に影が差して来ることについては十分に検討されているわけではない。この影は科学の社会というものへの影響と呼んでもよいであろう。

いずれにせよソシアトリーの体裁が守られているのは医学という看板が効いているお陰であることは説明するまでもない。

掲げられた理想が行き詰まりにぶち当たるかどうかはどうでもよいことである。いまや明らかとなっていることは、教育が、科学の次元においては、停止しており、神経学と同様、他の学問における教育も精神医学の問題を把握するには用をなさないという点にある。

安価な知

科学への関心はそうこうするうちに心理士、心理テストのテスター、ケース・ワーカーといったたいそうな名称のスタッフの手にランクダウンされて委ねられることになり、翻ってみれば、科学的ということばからすると、精神医学はどうしても途上にある領域だと**看做**されてしまう。

これは精神医学の医学のなかで占める位置からすると反論の余地のないことである。医学が大学潰けになっていることが諸悪の根源であることを唯唯告発すべきである。

他の学問でもそうだが、医学においても、〈大学〉の使命について与えることのできる最低限の定義、「知の利益を守ること」が当てはまる。この使命の裏には教育による優先買い付け権があるが、知は市場においてその時価が示されるのである。

他の学問におけるのと同様、〈大学〉はしくじり損は絶対しない。

しかしながら、〈大学〉とて市場の側からのしっぺ返しを受ける。

つまり、大学教育において授けられる知の評価額は資本主義市場において値がつけられる価格を下回る羽目になるのである。因みに市場価格とは商品としての価格、市場で消費される投入される労働をも含んだ価格である。

ここで最も基本的な事実を述べておこう。知を後生大事に守っている輩は隠しているのだが、知とは労働によっては得られないものだし、ましてや教育によってもこれは無理なのである。教育は、知との関係ついていえば、その効果でしかない。

このことで、労働者の知、はたまた人民の知というものを無視しているわけではないのだが、学者たちと同様、人民は労働によって知を獲得するのではないのである。

ガリレオもニュートンもガロアも、またいささか小粒ではあるがジェームズ・D・ワトソンもかれ等の業績は、かれ等の研究＝労働 *travail* にではなく、他者の業績＝労働に負うところが大きいのである。そしてかれらが掘り出しもの *trouvailles* にありつけたのは一瞬の閃きにお

いて伝授が実を結んだのであるが、促成栽培的で、傑出した先人たちを十把一絡げに扱うような教育を受けた者にはこれら先人の偉業も伝授されない。

専業主婦は読書が家事の妨げになること、家事という現実からの逃避であることがよく判っている注14)。一方で共産党員である労働者は読書によってかれらのステータスについて学習する。注14)逆説的であるが、ラカンからすると、家事こそが知であるといつてよい。

ところで知がもつ価値の査定額はどうなるのか。

穴からそしてこの穴を開けもし塞ぎもするほんのひと欠

片注15)から

注15)petit a と petit tas を掛けている

精神分析理論によってしか説明できない役割がここに割って入る。知の効果によって結実する理論であり、この効果により主体は生まれ、それはまた欠如の効果と軌を同じくする。欠如とは身体における切断を意味し、以上は対象aといった代数的な呼称のもとで可能となる。プティター (petit a)と読むと、パロールだけに寄り添っている文盲にはひと欠片 petit tas としか聞こえない。単なる情報上の障害なのであるが。

このような規定の仕方では対象 a については必要不可欠なものを満たしているのであるが、この対象 a はあらゆる哲学には一様に欠けているものなのであり、それは欲望の原因とも原因非在注16)とも呼ばれる。注16) acause。原因 cause に否定、欠如の接頭辞 a のついた語。a + cause でもある。対象喪失という術語があるが、そもそも斯様な対象、アガルマの対象など想定はできても存在はしない。知を想定される主体があっても、じっさい知をもっている主体など皆無である。その都度めぐり会う対象は斯様な対象ではなく、それゆえ墮ちることを運命付けられた対象なのである。

生き延び得たディスクール末期において、この欲望の原因ないし原因非在をわたしは剰余-ジュイール plus-de-jourir(ドイツ語で Mehrlust であり、これは市場の効果にではなくその原因である剰余-価値 Mehrwert と相同関係にあるがけっして類似関係にはない)と呼ばれる関数との相関で述べてきた。

本稿を読んでわたしの『エクリ』が精神分析の実践において重きをなしてきているとする読者もいるであろう。しかしながら、本稿がル・モンド紙の読者に向けてのものであるとしても、ル・モンドはル・モンドである以上注17)、読者が『エクリ』を参照することを禁ずることはないであろうが、当然のこととして、わたしに代わって『エクリ』を解説しようとしても、『エクリ』は斜め読みすることなどできない代物である。あるいはこの点を指摘した方がよいであろう。つまり、数学の真似ごとによってひき出すことのできるこのひと欠片の形成の効果は、まだ論理式による定式化がなされていないことから、『エクリ』のなかにおいても輪郭のはっきりしないままにあるのである。注17) quo talis est とあるが、qua talis est の誤りではなからうか。

この対象 a は、骨を折って解読を試みようにも、それが引き起こす剰余-ジュイールとしての旋風を煽る様〔さま〕よりも、それが穿ってできる鏡像に飛び込み一体となる構図の方が似合っている。

それはいつでも、鏡像において、理想という形で描かれるだけのものを持っており、知を想定された〈他者〉たるべきものである。これは精神分析が転移として提供するものである。

いやはや厚かましくも真理を産出するのだが、真理は唯々労働を強要するのである。

それは人間に同一化をもたらすために必要な労働であり、次いでこの人間がそこから生まれた女性との出会いにおけるジュイッサンスについていえば、このジュイッサンスを無効にする。つまり穴を見出すのだが、それは生きたものであり、去勢により、女性は真の女性となる。

少なくとも、この様な道を神経症が精神分析において切り拓いてきたのであり、精神分析は神経症をその反復を通じて真理において完遂させる。

こう言ってもいいぐらいだ。つまり、精神分析はスパルタのキャンプのなかの奴隷注 18)の手による養成法である。国際精神分析協会の保護地域においてはそれほど気を張らなくても済むのであるのだが、これはまた別の歴史として扱わなくてはならない。注 18)ヘイロータイ、*εἰλώται, εἰλωτες*, 古代ギリシャ時代、スパルタ人に仕えたラコニア、メセニアの土着民。かれ等の身分は中世における農奴に近い。<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヘイロタイ> 参照のこと。ラカンがかれ等を IPA 内で養成される精神分析家志望者に喩えているのである。

権利上も義務上も、そこでの養成は、爾来科学風の教育を自ら課していつているのである。

しかしながらある領袖注 19)のやり方はまったく違っており、内部での養成は、段階的なのか、儀式的にすぎないのか、あるいは生徒が横一線に並んでか、この内部はサロンのでもあるし退役し悠々自適な御仁の集まりのようでもあり、さらに家庭的ムードを嫌う者や放埒な連中もいたりであった。注 19)アンナ・フロイトのことであろう。

今日ではこのような協会内部での上下関係はありえないのであり注 20)、精神分析家は自己の養成のプロセスについて余計なことを考えなくてもよいし注 21)、足元が寒いと感ずることも周囲の視線を恐れることも発言するに際して小心翼翼になる必要もない。ティレシアスにはもう乳房はないのだから注 20)少なくともフランスでは権威主義的ではないと言いたいのであろう。注 21)IPA とは異なり、エコール・フロイディエンヌ・ドゥ・パリ(1981年、エコール・ドゥ・ラ・コーズ・フロイディエンヌに引き継がれる)にはパスがあるが、ラカンはこの対比について述べているのである。注 22)アポリネールの『ティレシアスの乳房』*Les Mamelles de Tiresias* において、テレーズは乳房を風船に変え空に飛ばして男性化し夫と別れティレシアス将軍にまでなってしまうのであるが、最後の場面では元のさやに収まる。しかしながら、夫から与えられる風船(乳房)を退ける。風船/乳房は対象 a ととらえることができるだろうし、最後の場面はラカンの愛の定義にも叶ったものになっている。*donner ce qu'on n'a pas* 「持ってない物を与える」において on は与える側とも与えられる側ともとれる。このパラグラフにおいては、対象 a は分析家のディスクールにおいて agent 「作用者」の位置にあり、分析のおわりにおいては、分析家は剰余-ジュイールとして、余りもの、いらぬものとなるのであるから、IPA を権威として恐れる必要はさらさらないわけである。

市場での価格が上昇するための努力は必要であるが、そのためには分析家も差別化を図らなければならなくなる。

構造主義的思想を標榜にするにしようでないにしろ知の主体 *sujet de la science* は市場における価格差の形成には如何ともし難いのである注 23)。注 23) *sujet du savoir* にせよ *sujet de la science* にせよ、ラカンにとっては、想定されど、実際はそのような主体は存在しないのはこのような市場での価格差でこの主体は評価されるからであろう。

わたしは、かれ等が片付けをするのにどれだけ苦勞しなければならないのか知っているとは言わないが、対象 a はどこに散らばっているか思い出していただきたい注 23)。注 23) じっさいは分析家が対象 a なのであり、片付けの対象となるのである。

Emoi については、<http://www.ogimoto.com/benkyo070831.html> 参照のこと。

五月の騒動と資本家の主体の記憶

考えてみれば、五月の騒動(そう呼ぶことになるだろう)では傍流が合流してきて怒涛のモチーフとなったことがよく解る。

こうなったことの意味を忘れようというのではない。というのも、市場価格の低下を騒動が負の流れを招いたと看做すことについて、若きブルジョワ注 24) にメリットがまったくなかった訳ではない注 25)。割り切ってこうこの運動の評価をし、次回の改革の運動に繋げることが合理的なのである。つまり黙って静観することができなかつた者も、次回の改革に向けた運動においては、敷石注 26) が儲けを生まないことには請け負わないであろう。注 24) この運動に加わった多くの学生はじっさい将来ブルジョワとなったことは確かであろう。注 25) 学生にとって(労働者団体にとっても)、かれ等運動に関わった者の主張が、権力側の勝利がゆえまったく権力側によって無視されたわけではなかった。労働者にとってと同様、学生側が望んでいた教育改革も僅かではあれ制度上の反映をみることになる。フランスが民主主義国家である所以ということか。注 26) 機動隊に向け投石となったものもバリケードのために積まれたものもまったく用をなさなかつた。結局は CRS(機動隊)の精強さばかりが目立った。

かれ等が唾棄すべきものとは消費社会の名の下にあるものであり、車は歩道の家具にすぎないものであつた注 27)。それほどこの社会には欲求を満たすもので満ちている。これ等の対象を宿命的な対象とは言えない注 28)。注 27) 何台の車が破壊されたのであろうか。しかしながら、フランス人の美質として驚嘆に値するのは他人の権利の主張に寛容なところである。車の持ち主も商店の店主も破壊され、あるいは盗み取られたものに対して声を大にして告発はしない。自由でも平等でも博愛でもなく、寛容さ *générosité*こそフランス人の誇りといえよう。注 28) まさに大量消費社会における商品こそ対象 a(剰余-ジュエールの意味で)と言えるのであり、宿命的な *fatidique*(例えば「宿命的な出会い」*rencontre fatidique* という言葉があり、そこでは赤い糸が愛するもの同士を引き合わせるとされているが、その破局がどれほど多いことか)対象など存在しない。

「ひと時代を画す」 plus jamais comme avant といったスローガンを連呼して声がかすれてしまうのが良き魂の五月の思い出注 28) となっているが、これは喜劇と解するべきであり、それも哀れな喜劇である。というのも、明らかなことは、これは前代未聞で繰り返されてはならない plus que jamais comme avant ことであり、五月の騒乱 émoi 注 29) はそれを引き起こしたものに陥るのである。

注 28) 五月 mai と記憶 mémorisation とのあいだの地口 maimorisation である。注 29) <http://www.ogimoto.com/benkyo070831.html> 参照のこと。

「単位習得制」注 30) が学位授与の基準となったのが大きな間違いの元で、知の価値の低下が市場の役割に結びついてしまっているのである。

精神科セクターに関していえば、大学が託児所化しているのと同様、たとえ科学がいまだに助け舟を出しているとはいえ、その改革への道は計画段階で頓挫してしまっており、総強制収容所化となっている注 31)。

注 30) フランスにおいても大学が乱立、マンモス化し、進学率が激増するのも同時代であり、学位大量生産のため制度改革は必然的でもあった。注 31) à savoir le camp de concentration généralisé とある。セクターが目指す地域医療も、大学における教育改革も、実質的に手付かずで、支配的なのは「市場」であり、市場からは抜け出すことはできないので、これも隔離なのであるから強制収容所という表現になっている。

騒乱の渦巻きはその穴の周りで激しさを増しており、穴の縁には到達する子は叶わない。なぜならば、この縁自体が穴なのであり、騒乱はその中心に引き寄せられているのだから。

回転している車輪にブレーキをかけることは若者には許されないのである。かれ等はそこに嵌ってしまっているのだから。この車輪のハブは、じっさいはこの役を果たしている者は不在なのであって、つまりかれ等のなかにリーダーはいないがため、何人か注 32) に頼みに回ることになる。注 32) 注 33)、ダニエル・コーン・バンディ、アラン・ジェスマール、ジャック・ソヴァジョ等のことを指しているであろう。

というのも、この出来事注 33) の主役は、本当は間に合わせの脇役なのであり、主役であるという意識は皆目もっていない。それゆえ、批判に対する反論は首謀者ひとりだけ注 33) によるものであり、グループから発せられているのではない。

注 33) 日本語では「五月危機」と訳されているが、フランス語では一部に La crise という語も見受けられるが単に Mai68 あるいは les événements de mai (-juin) 1968 が一般的になっている。当初は「68年5月革命」La révolution du Mai 68 と呼ばれていた。注 33) ダニエル・コーン・バンディであろう。

道を踏み外さないためには、以下のことを知っておくべきである。つまり、過去からは得るものがないのだから現在は偶然にまかせるしかなく、未来から推して知るべきなのである。アリストテレス注 34) とは逆である。かれは、現在は必然的なものにしがみついているのだが、この点訂正すべきである。明日の勝利者は誰だかわからないが、この者はもう既にことを支配しているのではなかろうか。アリストテレスが言う τὸ τι ἦν εἶναι は文字どおり訳すと「嘗てあったものが現在もある」でこれを通常「必然性」と訳している。

